

落語をより深く楽しむための歴史の小ネタ 発表概要

寺田隆郎(川之家河童)

まず前回の復習として、落語の源流について話をさせて頂いた。1628年、安楽庵策伝が「醒酔笑」を当時の京都所司代であった板倉重宗に献上したことを、落語の原点と考える。これを覚えるのに「いつも(16)にやにや(28)策伝和尚、醒酔笑は落語の祖」というフレーズを提案した。醒酔笑1000話のなかには、「寿限無」や「子ほめ」や「平林」など、現在でも演じられる演目(の種)も多く含まれている。

落語の熟成期(幕末から明治にかけて)において活躍した三遊亭圓朝は、落語中興の祖と呼ばれる。しかし音曲師だった父親は、いわば放蕩芸人で、圓朝は実生活では幼少のころから大変苦労したらしい。その圓朝が残した噺のなかには、「牡丹燈籠」や「真景累ヶ淵」「怪談乳房榎」「死神」「鯉沢」「大仏餅」など名作といわれるものが沢山含まれている。

落語家の亭号は烏亭焉馬(うていえんば)をもって亭号の嚆矢とする。その他、次のような亭号がある—三遊亭 古今亭 柳家 桂 林家 立川 入船亭 春風亭 柳亭 金原亭 橘家 五街道 隅田川 三笑亭 朝寝坊 快樂亭 昔昔亭など

噺を内容によって分類すると①滑稽噺:寿限無、垂乳根、目黒のさんま、粗忽長屋、あたま山など、②人情噺:芝浜、子別れ、富久、火事息子、ねずみ、厩火事 など、③怪談噺:怪談牡丹燈籠、真景累ヶ淵、もう半分、死神 など、④芝居噺:七段目、中村仲蔵、淀五郎、四段目、蛙茶番、豊竹屋 などに分かれる。

続いて演目理解の助けとなる歴史的事実についてまとめてみた。

①時そば

江戸時代の貨幣は4進法!

1両は1分金(銀)×4枚 1分は1朱金(銀)×4枚 なお1両は4000文

江戸時代の一時(とき)は現代の2時間に相当! また不定時法といって、昼と夜で一時の長さが違っていた。

昼の12時を九つとし、以下八つ、七つ、六つ、五つ、四つで九つに戻る 夜明けを明け六つ、日没を暮れ六つと称した。

②明烏 五人廻し

江戸時代の遊郭 素見(ひやかし)千人客百人、間夫(まぶ)が十人恋一人などと言われた。

茶屋、引け、大引け、若い衆、宵勘、大門、仲之町、五箇町、見返り柳などがキーワード。

③ 駒長 錦の袈裟 蛙茶番

三千世界の烏を殺し・・・という都々逸の世界。ふんどしまでもが損料屋(今でいうレンタル業)の世話になっていた。

④ 紫檀楼古木

羅宇屋、煙管、連尺、冠木門、狂歌などがキーワードである。

禁演落語については以下の通り。

1941年(昭和16年)、警視庁保安部は落語の内容に卑俗的で低級なものが多いとの非難の声を受け調査を実施、同年9月20日、遊郭や遊女を扱う廓噺や間男の噺など53演目について上演禁止とする通達を発した。これらの演目は同年10月30日、浅草寿町(現台東区寿)にある長瀧山本法寺で法要が営なわれ、はなし塚に葬られて自粛対象となった。戦後の1946年(昭和21年)9月30日「禁演落語復活祭」によって解除

最後に寄席の変遷について触れた。

① **噺矢** 1700年頃(5代将軍綱吉 元禄～宝永) 露の五郎兵衛(1643～1703)が京の四条河原で辻噺を始める。米沢彦八(?～1714)が大坂の生國魂神社(いくくにたまじんじゃ)境内で、小屋掛けの辻噺を行う。鹿野武左衛門(1649～1699)が江戸で座敷噺で評判をとる。なお1693年(元禄6)に江戸で伝染病が発生し、1万数千人以上が死亡した際、南天と梅干の実が良く効くという風評が広がり、めぐりめぐって武左衛門はこの事件に連座して召し捕られた。

② **寄席興行** 江戸の寄席興行創始者は、大坂出身の落語家岡本万作で、1791年(寛政3)将軍家斉の時代に、日本橋橘町の駕籠屋の二階で夜興行をし、98年、神田豊島町薬店(わらだな)に看板を掲げ、辻々にピラを貼って客を招いた。同年、初代三笑亭可楽(1777～1833)が、台東区下谷神社境内で5日間寄席興行を行った。また大坂では初代桂文治が(1773～1815)座摩(いかすり)社内で寄席興行を開催した。

③ **文化文政期**(1804～1830)には、江戸での寄席の数は225軒にも及ぶ。朝寝坊むらく、林屋(家)正蔵、三遊亭圓生、船遊(入船)亭扇橋とその弟子で都々逸坊扇歌など職業落語家が生まれる。

④ **寄席への弾圧** 老中首座に就任した水野忠邦は、徹底的に庶民の奢侈について弾圧を開始。寄席に対する規制も苛烈きわまりないもので、江戸に200軒あまりあった寄席は、改革が始まった天保12年には、自粛ということで75軒に減り、さらに翌13年には、本格的なお触れが出され、市中15軒・寺社地9軒にまで制限されてしまう。この頃、寄席で大人気だった女義太夫は、306人が一斉に逮捕され、三味線は没収の上、すべて火中に投げ入れられた。寄席の主宰者たちも様々お咎めを受けており、天保の改革により、江戸のあらゆる庶民文化は、まさに火の消えたような状況になってしまった。

(なお、上記③と④は時間の都合上、発表では割愛し、英語小噺を2席申し上げました)

参考文献:洒落倒し江戸300(富岳舎 広目屋隆助著) 落語に花咲く仏教(朝日新聞出版 釈徹宗著) 落語日和(山川出版社 落語日和編集委員会編) 落語修行時代(山川出版社 湯島で落語の会編) 落語でブッダ(NHK テレビテキスト) サライ(2015年9月号) もう一度学びたい落語のすべて(西東社 大友浩監修)